



岐阜県教育懇話会
〒503-0023
大垣市笠木町229-5
(0584)91-2478
口座番号 00800-3-5390

網 領

われわれは歴史と伝統を尊重し、日本にふさわしい中正な教育を推進する。
われわれは教養と品位の向上につとめ、真理愛の精神とともに、明るく純粋な教育を研修する。
われわれは個人の自主尊厳を尊重しつつ、政治的中立を厳守し、主体性を堅持する。

巻頭言

真の保守をめざして

「神州清潔の民」の伝統を思う

飛騨支部事務局長 浅野義英

はじめに

国内外で課題が山積している中、石破政権が発足して半年ほどになる。しかし、いわゆる裏金問題の弁明に矛盾が出てきて、政権の不安定要因となつてゐる。特に、自民党内の保守派といわれてきた、旧安倍派(清和会)の議員の多くが、不記載であったことで、長年培つてきた保守勢力の勢いを凋落させ、その流れを変えてしまった。

戦後の国政選挙における政党への投票率をみると、ほぼ三割から四割の有権者は自民党を支持してきた。しかし、政治の汚職や腐敗などをメディアに報道されると、一般の国民はいうまでもなく、保守的な国民からも失望を招いて支持率が二割へと下がっている。

このことは、メディアの批判報道の影響や、ポピリズムの風潮も大きい。根底には日本の国民性である

清潔さがあるのではないか。

我が国民は「神州清潔の民」

幕末の志士、伴林光平は、河内国の尊光寺に生まれ、僧職の身で仏教を信奉していた。その後、和歌、国学を学び、古代の人々の生き方を知り、我が国の民は「本は神州清潔の民」であつたとして、僧職を捨て、神道者として歩むことを決意した。「清潔の民」は、その時に発した詩の一節である。

古来、日本は禊ぎ、払いをするこゝとで心身を清浄にし、自然の神、祖先の神に対するという信仰があつた。我が国では、生命を育む水が清くて豊富であるといった風土によるのであろう、自然における清浄なものを大事にしてきた。それは衛生面のみならず、心身のありようにも、大きく影響したのである。

神道の世界では「淨いこと」「明るいこと」「正しいこと」「素直なこと」が、尊ばれている。これらは、世界の誰もが貴ぶところであろうが、特に日本民族は、光平が発したように「清潔の民」であり、その伝統、文化が生活全般で培われてきた。手が汚れば手を洗う、インフル

エンザが広がればマスクをする、

ゴミがあれば掃除をするなどして身辺を清潔にする。そのような心のありようは、政治にも求められている。

安倍政権の功績

戦後の宰相で、世界を俯瞰して国内外の政策を推進できた卓抜な人物の一人は、安倍首相であろう。自民党は、結成時に目標として憲法改正を掲げたが、長年、なおざりにしてきた。その点、安倍首相は憲法改正を強く唱え、教育基本法の改正し、防衛庁の省への昇格などを実現させ、対外的にも、中国政策で大きな成果をあげている。

習近平は、「中国の夢」「中華民族の偉大なる復興」の実現に向けて、米中による太平洋二分割論、第一列島線、第二列島線による防衛圏の設定、一帯一路、A I I B構想などで露骨な覇権主義を推進してきた。安倍氏は、その動きを警戒し、日米同盟を強化し、集団的自衛権を行使できるように、安全保障法制を制定した。

中国は公海である南シナ海の一方的な領海化を進めている。これは台湾、ベトナム、フィリピンのみならず、日本の物流の大動脈「シーレーン」の維持を困難にしかねない。安倍氏は、それを見越して、環太平洋パートナーシップ(T P P)を推進し、日米豪印の戦略対話「クアッド」を提唱し、具体化させた。中国の覇権主義に対処し、アジア太平洋の平和の維持に努めた功績は、アジア諸国のみならず欧米の首脳からも高く評価された。

政治家・安倍晋三の原点

しかし、残念ながら安倍氏は、悲願の憲法改正を果たすことなく、凶弾に倒れた。安倍氏が生前に著した『美しい国へ』を読むと、保守の政治の在り方、対米外交の在り方、アジア諸国との関係構築、教育の再生など、政策全般にかかわって、日本の真のナショナルリズムの有り様を述べ、その理想の高さを読み取ることが出来る。

ただ、著書の中に父・晋太郎氏の教訓として「政治家は、自らの目標を達成させるためには淡泊であつてはならない」とあつた。これは政策をなし遂げるには、強い信念をもつて断固としてやり遂げる意志がなければならず、そのためには手段も選ばないとも読み取れる。

安倍晋太郎氏は、福田赳夫の清和会に属し、外務大臣として活躍をし、次期総裁の有力候補であつた。↓4面

第10回皇學館大学  
道徳科教育研究協議会・報告

編集部

昨年十一月二十四日、伊勢市皇學館大学において、道徳科教育研究協議会の研究大会が開かれた。

今年のテーマは「実践とその理論化をめざして」として実践発表・記念講演・シンポジウムが行われた。

テーマについて代表の渡邊毅教授は、「本研究協議会で発表されたすぐれた実践を承けて、研究者による理論化が行われるようになり、共同研究が続いています。その経過を午後

のシンポジウムで発表していただきますので、皆さんにも後意見を頂きたい。」と説明された。



午前の実践発表は小中高から四名の発表があった。最初は千葉県公立小学校の小出潤教諭で、「吉田松陰流教育」一人一人が輝く教育変革への道徳」と題して熱の籠もった発表が行われた。



のために一人一人に志を懐かせなければならぬ。志が立てば自ら学び、行動していく人間が育成できる。従来のような教えた内容を覚える勉強は枝葉の部分で、大切なのは生きるかどうかということか、何が大切かを自分のものとするかどうかだ。

そのためには①自分が生きている時代はどのような時代かを知る、②魂をもつた祖先が今日をつくってくれたことに誇りをもつ、③その上で自分は何を為すべきか考えることが大切。それが吉田松陰流の教育である。

日本の子供は自己肯定感が低く、自殺者が多いという現状を変えたい一心で教育者は立ち向かうべきと考えておられ、様々なプロジェクトに参加して、奮闘をされていた。



中学校からは愛知県公立中学校の熊谷雅之教諭が「自己探求と立つ学対話を行動に繋げる道徳の授業」と題して発表された。

まず「哲学対話」という指導法について、参加者に体験をさせながら理解を図られた。この時には「良く見るYouTubeは何」を考えさせられた。

せられた。こういう問いであれば、誰もが答えられるし、他人が何を言っているか興味深いのでどんどん話がかはすむ。こうした話しやすいテーマで慣れさせるとともに、どんな発言もバカにしないなどのルールも考えさせ、安心して話ができる雰囲気作りをする。どの子の発言も人生を背景にした真実が含まれるとの指摘もする。また子供はどの子も話をしたいという欲求があり、話すことで自己存在感が高まり人間関係も密になる。結果、グループや学級の雰囲気もよくなり、授業の土台ができる。

熊谷氏は道徳授業の半分くらいを「哲学対話」で行っている。生徒は一〇〇%それを支持しているという。氏は子供達になりたい自分を見つけて欲しいし、自己実現をさせたいという指導理念がある。子供に表現させることで、お互いのよさ、自分のよさも気づき、生き生きと学ぶものである。それを信ずることだ。

続いて奈良県立高校の坊佳紀教諭の「自分で決めたら幸せになれる」と題した実践を語られた。



先生は自分が幸せでなければ、生徒も幸せにできないという信念で、家族を大切に、毎日を楽しく生きておられる。その根源は自

分で決めたものが幸せにつながるという確信である。そのため生徒にも自己決定を望み、クラスは常に安心・安全な空間でなければならぬとして、一人一人とのコミュニケーションを大切にしていた。その一つが毎日全員と挨拶し、言葉を交わす。交換日記を通して相互理解を深め、学級や家庭に通信を発行して話題を皆で共有している。

特色ある授業として「わかたーく(哲学対話)」を取り入れ、道徳授業などは半分はその方式だという。そのため生徒は毎日楽しく過ごしている学級では三十九人中十三人もの生徒が先生のような教師になりたいと言って進路志望をしたという。聞いて楽しくなる発表であったが、教育改革は文科省や教育委員会に頼むのではなく、自分自身が実践して広めることだという提言は心に響いた。

最後に兵庫県立高校の和田秀雄教諭の「教師の在り方から始まる道徳教育」という題で話された。

先生は幼少時、家庭的に恵まれず養護施設に入所しても上級生にいじめられるなど、壮絶な体験をされていた。その中で自分のような子供を救いたいと教師を目指して勉強をし直し、高校の教壇に立つことができた。しかし、授業に生徒は参加せず何のために教師になったのか自問し



た。そこから様々な研修会に参加、勉強し、授業で生徒を主体的にさせる手立てを身に付けてきた。

発表は先生の一方的な話で進むのではなく、最初は全員でじゃんけんゲームをして気持ちをほぐし、話の途中には①なぜ教師になったか、②何のために教師を目指したか、③どんな種をまいてきたか、という問いを發して、常に自分事と考えさせながらの発表であった。この話の進め方そのものが、実践の要点だった。

最後に、文化祭で劇を成功させた話の中で、学級や学校での活動を考えた時、シヤンパンタワーの頂点は誰かと質問をされた。多くは「校長」「学級長」などと答えたが、和田先生は「自分」と言われた。自分が主体的に本気で取り組めば、学級も学校も変えることができる、というのが先生のメッセージであった。



午後は記念講演とシンポジウムであった。講演の講師は株式会社ティア代表取締役富安徳久氏で、「尽生(じんせい)と志事(しじ)」と題して話された。

氏は平成九年に葬儀会社ティアを設立し、今日までの三〇年足らずで

全国に二〇〇店舗をもち、年商一〇〇億円を超える大企業に育てた伝説的経営者である。

話は会社の設立時のエピソード、経営理念、事業展開、社員教育などの考え方を語られ、現在の家庭教育、学校教育の問題点などを率直に語られ、その熱の籠もった話しぶりに引き込まれた。

なぜ短期間に全国に店舗をもてるまで会社が成長したか。それは会社とは何のために、誰のためにあるかという経営理念にあった。会社はお客様の幸せや喜びのためにある。

それを社員に徹底して事業を進めたのであった。社員には、利益をあげることで、お客さんが喜ぶように、他人のために働くことを求めた。人のために働くことは、喜びであり自分の成長になる。自分が成長しない仕事は充実感も喜びもない。そのため「お客さんを騙すな」「法令は順守せよ」と教えた。

なぜそういう経営理念に至ったか。それは、自身の家庭教育が大きかったという。家庭は果樹栽培農家で、両親と祖母はその仕事で忙しく、授業参観など全く来てもらえなかったという。勉強せよといった小言も一切なかったが、小さい時から、「自立せよ」ということと、「笑顔でいなさい」と常に言われた。自立について

は、「今はご飯も洗濯も皆やってもらえるが、ばあちゃんも両親も先に死んでいなくなるよ。そうなったらすべて自分でやらなければならない。だから、自分で何でもするようにしなさい。」と分かりやすく教えてくれた。笑顔も、「笑顔でいたら、相手は安心して相談してくる。相談に乗れることは嬉しいことだ。」と。すべて理由を分かるように教えて、親たちも実践していたという。そして、将来は「世の中の役に立つ人になりなさい」というのが願いであった。



祖母、両親の教えを自分の志として葬儀会社の仕事に打ち込んでいる。それが社長の使命であり人生なのである。

シンポジウムは「道徳カードの実践とその理論化」と題して、パネラーに津市立美杉小学校の溝口哲志教諭、南山大学教職センターの市川哲講師、草津養護学校の森本晃介教諭の三氏と、司会の皇學館大学渡邊毅教授が進められた。

溝口先生は学級経営の中で、ポジティブな声かけを子供どうしが行うことにより、道徳性を高め、学級の雰囲気温かくし、満足度を高める方法を実践している。それはアメリカ

カのPBISというポジティブ生徒指導の応用で、PMC法(カードを使ったポジティブ生徒指導の方法)と呼んでいる。

学級の子供達にカードを配り、友達のおさを見つけて記録していくことにより、自分のよさに気づいていくというものである。実際に崩壊した学級を受け持って、それを取り入れて立て直したり、学級の風土を向上させたりした成果を発表された。

市川講師は溝口教諭の実践に注目し、データを集めて効果を検証し、実践を定式化できないかを考えている。それが出来たら、教育理論として応用が広まるのである。溝口学級でのポジティブ道徳カードの実践により、児童の登校力・期待徳目行動・自己評定尺度の得点が向上していることを確認している。

森本教諭は、特別支援学校でもPCM法が有効であることを、自分と同僚の実践で確かめている。

カードの交換は学級活動、自立活動で行うが、生徒同士の関わりが深まり、自分のよさに気づく生徒が多くなった。道徳的な行動や感謝の言葉が増えたことも道徳的価値を身に付けた結果と受け止めた。

以上、本年の研究協議会も素晴らしい実践と講演に圧倒されて、今も余韻が残っていることを報告する。

↓そして、総裁選へ二度立候補をしたが、田中派の資金による票集めに敗れ、病をわずらい他界している。秘書として、それを見てきた晋三氏は、政策を実現するためには、何が何でも選挙に勝たなければならぬと、痛感したのであろう。

### 政治と企業の癒着

日本の政党政治史を概観すると、明治二十三年に帝国議会ができる前から、政治家と企業が癒着してきている。

当時、日本は近代産業の揺籃期にあり、新政府は欧米企業の圧倒的な資本力に対抗するために、官営工場を設立し、同時に民間企業の育成を図るため、官有物の払下げ、民営化を推進した。

例えば、英国の船会社P&O社や米国のPM社などは、太平洋航路、欧州航路、上海航路のみならず、日本の沿海航路を独占する勢いであった。それに唯一対抗できたのは岩崎弥太郎が率いる三菱郵船であった。

政府は外資に対抗するため、渋沢栄一の合本資本による民間企業の育成などを進めた。それは、ネットで巨大な多国籍企業が世界市場を独占する今日に於いても同じであるが、政府の国内企業への支援は当然の措置である。

そのような背景にあって、政府の

みならず、板垣退助の自由党、大隈重信の立憲改進黨、それを支えた自由民権運動にも企業との癒着が生じた。その後、政党の分裂合併などの推移があったが、国民が知らなければよいという金権腐敗の温床も培われ、現在に至っている。

### 戦後の保守政党の誕生

日本の保守政党といえば自由民主党であるが、それは終戦直後にできた日本自由党と日本民主党が、昭和三十年(一九五五)に、合同してできた政党である。

当時、世界は米ソの対立が激化しており、社会主義を唱える社会党や共産党が台頭していた。それに対して自由民主党は、自由主義を掲げ、「祖国愛と自主独立」「秩序と伝統の中に常に進歩を求め、反省を怠らず、公明なる責任政治」を目指して結成された。その綱領の六条には自主憲法の制定を挙げている。

元々、日本自由党は、戦前の二大政党であった立憲政友会の流れを汲み、日本民主党は立憲民主党の流れをついでいる点で、戦前・戦後を通しての国民政党であった。

### 西欧における保守思想

その源は、「保守思想の父」といわれる英国のエドモンド・バークにある。バークは、ホイッグ党(後の自由党)の下院議員であったが、隣国

で起こったフランス革命を痛烈に批判した。革命賛美の渦巻く欧米で、『フランス革命の省察』を著し、積み上げてきた歴史の継承を断絶し、抽象的な理念に基づく自由・平等を唱える革命のもつ暴力性・破壊性・残虐性を問題視した。

当時、英国民は、「相統継承の原則こそは、政治組織の基礎であって、特に王位の血統による継承が重要視され、プロテスタントの宗教も貴族政治も、民衆の自由も継承相統すること」を大切にしてきた。そして、「古代に対する尊敬は、政治における堅実にして抑制の力となり、先祖より相統してきた自由に尊厳性を与える」とし、歴史性を大切にした。

英国は、先住民のケルト族や、ゲルマンのアングロ・サクソン族、それを支配したノルマン族の征服以来、それぞれの民族の伝統や習慣を大切に、対立や調和を繰り返しながらも、それらの多様性と統一性を図りながら歴史を形成してきた。そして、マグナ・カルタの大改革以来、時代に即して制定法を整えてきた。バークは、そのような英国に誇りを持ち、改革については、漸次慎重に行うべきであると述べている。

### 日本における真の保守とは

戦後、日本は敗戦国でありながら、急速な復興をなし遂げた。その要因

は、日本人の勤勉性のなすところであるが、「天皇」の御存在が大きかった。「美しい国」には、次のような逸話が載せられている。

米国の駐日大使であったマイク・マンズフィールド氏が、父の晋太郎氏に「私が日本の経済発展の秘密についてずっと考えてきたのですが、安倍さん、何だと思いませんか・・・それは天皇です」と話したという。そのことについて、安倍氏は、「戦後の日本社会が基本的に安定性を失わなかったのは、行政の長とは違う『天皇』という微動だにしない存在があつて可能だったのでないか」と述べている。

日本の歴史を紐解けば、常に天皇は国民のことを思われ、国民とともに歩まれてきた。それは歴代の天皇の御製にもあらわれている。それを思えば、真の日本の保守とは、陛下の大御心にそつて政治を行うことではないか。

伴林光平の「本是神州清潔の民」は、陛下を戴く名も無き民の思いであり、政治における金権にまつわる不祥事は、今後とも国民から厳しく批判されるであろう。

### 「現代国民講座」のお知らせ

期日・五月六日(火)午後二時〜会場・ハートフルSG「丸尾錦作先生の業績」講師京都産大名書教授所功氏